

連載コラム

第32回

櫻井よしこ

日本ルネッサンス



沖縄の二大紙が報じない県民の声

沖縄の二大紙、「琉球新報」と「沖縄タイムス」を幾十年か、記憶に定かでない程の年月、購読している。感想を率直に言えば、両紙はもはや新聞ではないと思う。理由の第一は、両紙がまったく同じ記事を掲載することが少なからずあることだ。社説まで一言一句違わないという印象さえ抱いてしまう。手元の直近の紙面をいけば、第6回太平洋・島サミットの5月27日の記事である。琉球新報3面の「中国けん制狙う日本」〔初参加の米と連携〕などの見出しがついた10段の大記事は、同日の沖縄タイムスが2面と3面に分けて報じた「日本、絆維持に腐心」中国、太平洋へ急伸の見出し、これまた大きな記事と一言一句違わない。恐らく共同通信の配信記事を見出しや段落の分け方などのみ各自が行って、中

身はそのまま使っているであろう。物書きとしては、恥を知れと言いたくない。自分の足で稼ぐのが記者の誇り。自分の意見、洞察力で物するの、社説を書く論説委員の誇りである。にも拘らず揃いも揃って沖縄二大紙の知的感情は甚しい。二大紙の知的欠陥は記事内容の偏りに顕著である。物事を公平に見たり全体像を把握する努力の跡が見えず、イデオロギーに凝り固まった記事をこれでもかこれでもかと読まされるのは、辛いものだ。それでも私は両紙を購読し続けている。理由は沖縄の実態を知りたいこと、日本の行方考えるとき、安全保障、歴史観、中国外交などを中心とする沖縄問題の解決が非常に重要だからだ。これらの事情を筆頭にいわゆる沖縄問題は数多くあるが、

いずれも不条理ともいえる捻れ方をしている。主要要因のひとつが二大紙の偏向報道だと書つてよいだろう。二大紙の伝える「沖縄の声」や「沖縄の良識」が、必ずしも沖縄県人一般の考え方や感じ方と重なるわけではない。沖縄での取材や数百人を対象に度々行ってきたボランティアベイスの講演の体験から、私はそう感じていた。

反戦平和が免罪符

むしろ、両紙と沖縄県民の思いは離れる一方ではないか。たとえば今年2月12日投票県議の宜野湾市長選である。反米軍基地開争の立役者で当初、圧倒的に有利と報じられていた伊波洋一氏が、新人の佐喜真淳氏に僅差で敗れた。伊波氏は2010年の沖縄県知事選挙に宜野湾市長2期目を途中で退任して出馬して敗れ、2月の選挙で市長への返り咲きを狙い、再び敗れたわけだ。

言を指しているのは言うまでもない。5本の評論の中には、沖縄人権協会理事長で、左翼運動の中心的な人物、福地謙昭氏の、メア・田中両氏に対する徹底的で感情的な非難の評論がある一方で、両氏への非難に事実関係から迫り、「ゆすり」や「犯す」という発言の存在自体を否定したのが、評論家の津嘉山武史氏である。どちらに説得力があるか。事実を押さえて、事の経緯を辿った津嘉山氏の評論の前では、福地氏の評論は色褪せて見える。

（感）見事に嵌められたという見方が今では一般的」と結論づけている。反戦平和が免罪符となっている沖縄の言論界で、津嘉山氏の評論は言論人としての誇りと信念なくしては展開できないものだ。集団の力を持って隊に検証もせず一方の決めつけ記事を書く二大紙の記者、論説委員全員がお手本とすべきであろう。同志の迫力はここにどこまでも「沖縄的」なるものの「偏狭」さを痛切に衣著せずに語り、沖縄の甘えを分析した宮城・星野氏の巻頭対談こそ痛快である。

甘えの概念

津嘉山氏は「沖縄を始めとする反基地運動やその他の左翼的運動を積極的にこなしていた活動家で、土井たか子氏が代表を務める「憲法行脚の会」の事務局長」としての、猿田佐世という弁護士に言及し、メア氏は、「銀田弁護士が」仕掛けた民に、

宮城氏は1972年の沖縄復帰のとき、小学6年生だった。その世代には「私は日本人か沖縄人か、私は何者か」という問題意識があった。

いまの若い世代は、その疑問と無縁でありながら、「自分は日本人というより沖縄人と言いたい」と主張するという。日本人であることに疑いをもつ必要がなくなった彼らが、そういった主張を許してくれる日本という国に甘えている結果だと、氏は分析する。多くの事象の基底に、甘えの概念がこびりついていると沖縄の知識人が指摘するのだ。そうした世論形成に貢献してきた二大紙の特徴を両氏はこう論じている。

「沖縄の新聞はこの10年、キャンペーンのためのペーパーなのかな」と感じてきたと宮城氏が言えは、星氏は「沖縄の新聞のキャンペーンが国を動かすようなところになっている」「その味を覚えてつきつき策謀するメディアが存在し、「自己の捏造を許容し、他者の捏造を非難する」のだと両氏の分析は鋭い。小さな文芸誌がこんなにも大胆に明晰に沖縄問題の本質を説き明かしている。二大紙となんと対照的なことか。このような文芸誌と論者が存在する沖縄に、私は大きな希望を抱きつづける。また明日から、我後して二大紙に目を通していると思う。

日本ルネッサンス

お待ちになつて、

マッカーサー

元帥閣下

自伝 笹本恒子の97年

笹本恒子

総理大臣の首根つぎを

キツと締め上げ、

マッカーサーを呼び止め、

那須のご用邸にアポ無し突撃。

戦前、戦中、戦後、そして現在……

日本で最初の女性報道写真家が、

波瀾万丈の97年を振り返る。



定価1680円税別

毎日新聞社 1F100-405 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 (ホームページ) http://books.mainichi.co.jp/

対談

沖縄思想が対応する現実問題



参加者

みやぎ よしひこ 彦 (沖縄大学教授・社会学)
 宮城 まさひこ 彦 (詩人・コーディネーター)
 ほし星

反復帰論と沖縄思想

星 今日タイトルは「沖縄思想が対応する現実問題」というふうに、ちょっとこちないタイトルではあるんですが、正面からぶつかって自分たちの考えを出した方が理解しやすいかと思っています。一対一の対談ですから、自分をまずさらけ出して、そこからいろんな解釈も出てくると思いますので、ひとつよろしくお願います。

宮城 よろしくお願います。

星 宮城先生は専門はなんでしたっけ。宮城 僕は社会学です。

星 ということは、このタイトルとびつたりだな。

宮城 そうなくもないですが…。

星 「沖縄思想」って指定しましたけど、どうですか、「沖縄思想」にはどういう原点があると解釈しますか。それは右よりなのか。左よりなのか。一概には言い切れないですよ。

宮城 そうですね、それ自体が今すこ

く曖昧になったままに個別具体的な議論になっちゃってるというところが問題ではないかなと思います。

星 左翼指導者の人が、好んで使う言葉かもしれない。自分たちの思想が沖縄思想を代表してるというふうに通じるふしがありますね。しかし、この点で彼らだけが独占できるものでもないし、この沖縄思想が対応するというのは、まず現実の問題として我々がいろんなことを考える中で、まず一番に、自分に跳ね返ってくるものって何でしょうか。

宮城 思想に限らず「沖縄的」といつたときに、僕らは何を見て沖縄的といっているのかというのは、それはもちろんだいぶ昔から、伊波普猷の時代から議論があるわけですけど伊波はともかく、最近はいわゆる「本土」、日本だけを見て、それに対する沖縄といっているような気がします。思想に限らず、「沖縄的」といつたときに、逆に偏狭なものになってしまっている。そのへんが僕はまず引っかけられます。

星 一九七〇年の頃は日本復帰するだろうという、そういう予測もあったけど、また、日本全体で「沖縄を返せ」という歌を歌ってね、全国的な盛り上がりもあったんですね。そして沖縄の知識人たちが大いに発言する機会があり、原稿依頼も随分ありましたね。「沖縄特集」というかたちで、一種の沖縄ブームだったと思います。もてはやされた時代だった。

宮城 その頃僕まだ小学生ですから細かなことは理解できませんでした。大学生以降に文献で読んで知ったことがほとんどです。ただ、空気は感じてました。「沖縄を返せ」の歌も、その運動も僕は見えますし、日の丸の旗を宿題でつくってきて、復帰行進で振るといいうような時代の小学生でしたから。

星 日の丸といえば、不思議なことに、あれは正月だったかな、とにかくあつちこちの家で国旗掲揚しているんですね。これは珍しいなと思ってね。しかし、そのあと復帰してから二、三年経ってだんだんいろんな否定的なことが言われるよ

うになった。今度は日の丸を掲げない傾向に変貌するんですね。こうした現象が沖縄的体質を意味するみたいですね。

宮城 僕は、復帰したのは小学六年生の時で、小学生の時は日の丸を掲げましょうと教えられたんですね。日の丸は学校で売っていました。ところが、復帰して中学生になったら、先生が一八〇度違うことを言い出したのです。日の丸は軍国主義の象徴だから、掲揚してはいけないという。戦後民主主義になって墨ぬり教科書という、あれほどではないんですけどね、かなり先生たちが豹変したなという体験をしてるんですね。

星 ということは、教職員の人たちの発想が、今度は日の丸を掲げさせない傾向に変わっていったということですね。

宮城 はい、一気に、一八〇度変わっちゃって。

星 教職員の変心だろうけれど、それはおかしな現象としか言えない。そしてもう一つ、集団自決のあった慶良間諸島、渡嘉敷島や座間味島では、特に渡嘉敷島

では今でも正月には国旗を掲げてるんです。あれをどう解釈しますか。

宮城 あれが普通ですよ。僕は調査でもよくやんばるに行きますけれど、やるでも正月に国旗掲げる家があります。例えば郷友会の新年会とか、トゥシビー祝いでも日の丸がつてます。だから表向きというか、メインストリートでは揚げられなくても、実は復帰前から変わっていない人たちというのもかなりいると思うんです。

星 スポーツの国際的なオリンピック等でもそうだけど、その国の国旗というのが非常に意味があるんですね。日本の中でも自分たちは完全なる日本人かどうかという考え方もあるけれど、やっぱり日の丸に対しては敬意を払いたいという気持ちがありますよね。ところが、さっきもおっしゃったように教職員組合などで、国旗を掲げることへの拒否反応と同じく、君が代は歌わないというような状況もあるんですね、これは戦前の学校教育とは全く違います。この変化と、

それからさっき言った復帰を境にした、復帰運動もあつたんだけど、新川明のような反復帰論を出して、ああいう意表を突いた勇ましき、あの居直り、どう思いますか。

宮城 一言でいうと、よく分からないとしか言えないです。復帰に反対するという政治的な発言ではないとおっしゃるんですよね。直ちに独立せよというわけでもない。これが政治的な発言でないならば、では何なんだろうということになる。これはアイデンティティの問題なのか。でもアイデンティティの問題にするならば、かなり違う中身になるはずです。

星 精神的なものを指しているらしいが、言っていることはそれほど難解ではない。ただ根拠が見えてこないの、意味不明になっているような感じですよ。

宮城 こう言ったら失礼ですけど、わざとその辺りをねらってるのかなという感じがします。必ずしも望んだかたちではなかったと、復帰が。それはたぶん県

ドキュメンタリー作家 上原正稔の挑戦！

琉球新報の言論封殺との戦い

江崎 孝

去る一月二十四日、「バンドラの箱掲載拒否訴訟」の第五回公判が那覇地裁で行われた。この訴訟はドキュメンタリー作家上原正稔氏が、琉球新報の「言論封殺」を訴えるという前代未聞の裁判であるにも関わらず、これを知る県民はほとんどいない。沖縄の二大紙、琉球新報と沖縄タイムスが、自分たちにとって「都合な真実」は、決して報道することはないからである。

■上原氏怒りの記者会見■

ちょうど一年前の一月三十一日、県庁記者会見室で上原正稔氏が記者会見を行った。その日の午前中に、上原氏は琉球新報に対する損害賠償訴訟を那覇地裁に起こし、それを受けての会見であった。代理人の徳永信一弁護士が訴訟の概略を

説明した後、マイクに向かった上原氏は、開口一番沖縄戦時に慶良間島で戦隊長を務めた赤松嘉次、梅沢裕両氏に対して「大変なご迷惑を掛けた。許してください」と詫言の言葉を述べ、「両隊長による」集団自決の命令がなかったことは火を見るより明らかだ、「真実を伝えるのがマスコミの使命だ」と訴えた。

さらに、記者団に向かい「琉球新報の記者は来ているか」と問いかけた。若手の記者が「はい、来ています」と挙手で答えると、上原氏はその記者に向かって「君たち新聞記者は、都合の悪いことは報道しないが、この裁判で君の会社が訴えられたのだよ！」と一喝し、「これを明日の記事にしなかったら新聞社の恥だよ」と釘を刺した。気の毒にも、まだ若い記者は、上原氏の気迫に押されたのか「ハイ」のひと言だけで

ウチナー口の秘密の扉が開かれた

— その鍵は梵語だ —

上原正穂

— 紀元前三世紀のことだ。大科学者として名高いアルキメデスは友人のシシリイ・シラクサの王から純金の王冠の制作者が銀を混ぜているらしいのでその不正を暴いてくれ、と頼まれた。だが、どうすればよいのか、さっぱりわからぬ。ある日、浴場に行き、浴槽に身を沈めると体が軽くなり、湯がザーとあふれ出た。その時、ピンと来た。物には「比重」があるのだ！ アルキメデスは素っ裸のまま、街に飛び出し、「ユーレカ、ユーレカ（発見したぞ、発見したぞ）」と叫びながら、自分の研究室に走った。

ぼくは発明の才能はゼロだが、発見の才能はアルキメデスほどではないが、かなりのものだ。この数年、図書館に通い、「ユーレカ」を繰り返している。だが、素っ裸で街に出ることとはない。それがぼくとアルキメデスの大きな違いだ。ユー

レカ「発見」ほど心躍るものはない。それがぼくとアルキメデスの共通点だ。

ぼくはこれまで意味不明だった無数のウチナー口を解明してきた。それが新聞で紹介されることはなかった。（その理由を賢明な読者は既に知っているはずだ。）

カナ、カマドウ、ウシー、ナビ、カナシーなどの女性の奇妙な名前に神々しい意味があることが判明した。さらに北谷、伊是名、目取真、田名、我謝などの意味のつかみ所なかった人名、地名、数百の神聖な意味も明らかになり、芝居の泊アーカーや伊江島ハンドウの意味も明らかになった。極楽でもあれば地獄でもあるとされてきたニライカナイや八重山の英雄オヤケアカハチ、宮古のタンディ・ガー・タンディの真の意味も解明した。

「首里」の意味だけでなく、首里城入口の守礼門の近くにとつと佇む園比屋武御嶽の意味も判明した。庶民の手の届かなかった「おもしろそうし」の「おもしろねやりや せるむねやりや」を始め、いくつかの「おもしろ」詞を解明し、その全容解明が可能になった。昨年のクリスマスには神祕の祭りとして「イザイホー」の真の意味が解明され、その復活が可能となった。

これらのウチナー口解明の鍵となったのが梵語である。これから驚異の、そして感動のウチナー口の世界を訪ねてみよう。

神々しいウチナー女性の名前

それほど昔のことではないが、ウチナー女性の名前はカナ、カマドウ、カマラー、ウシー、ナビ、カナシー、カニメガなど奇妙なものがほとんどだった。今でも、高齢の女性にこうした名前を見つけたのは難しいことではない。だが誰もこうした名前に深い意味があると考えないからナビ、カマドウと名付けたのだろうと誰もが思い、学校では女生徒は「お前は鍋か、窯か、悲しいか」とからかわれ、改名する者が多かった。

ぼくは糸満という有名な漁師町で育ったからガキの頃から

日本語を使うのはアギジマー（いなか者）だと思い、友人たちとはイチマン口で話し、それを誇りにしていた。ウミンチュ（漁師）は決してヤマトウ口（日本語）を話さない。それがウミンチュの誇りであり、「人間の条件」だった。

だが、ウチナー口で話せる友人が少なくなり、ウチナー口が減びゆくのを黙って見ていくわけにはいかない。そこで数年前からウチナー口の起源の本格的な研究を始めたのである。

ある日、図書館でふと「梵和大辞典」という厚い本を見つけた。Etyma (ウトウラサ) Ⅱ 恐怖, abla (アガー) Ⅱ 苦痛という言葉が目に入った。なんだ、これはウチナー口ではないか。それから連日、図書館に通い「梵語」を調べ始めた。出てくるわ、出てくるわ。ウチナー口の語源が姿を現したのだ。ユーレカ（発見）の日が続く、いつの間にか、ウチナー口の秘密の扉をこじ開けていた。今ではおよそ一千のウチナー口（これには宮古や八重山の言葉も含まれていることをお断りしておこう）の梵語による語源が集まっている。

その一部をここで紹介しよう。

カナ (kana) は「少女」、カマラー (Kamala) は「美と繁栄の女神の娘」、ウシー (usa) は「希望」、カマドウ (Kama-dau) は「如意牛」すなわし「すべての願望を叶える牝牛」を意味している。牛はインドで神の化身として崇拜されている。ナビはナビ (Nabi) で「くそ（の緒）」、カナシヤ (Kansya) は「小さく可愛らしい（子どもなど）」、カニメガ